

復興を支える大きな力

活動広がるボランティア

震災後、全国各地から次々とボランティアが被災地入りした。家屋に溜まった泥のかき出しや被災家屋からの家具の搬出、がれき撤去など、人の手に頼らざる得ない地道な作業は、被災者にとって大いに助かった。労働作業が一段落すると、今度は生活支援へと活動が移り、仮設住宅への引っ越し手

伝いや孤立させないようにお茶飲み会などのイベントを開いて、コミュニティの形成を図っている。さらには高台への集団移転など将来のまちづくりの助言へと活動は続く。被災地に根を下ろし、息の長い支援を続けるボランティアの今と、今後の課題を聞いた。

(阿部容典)

地域に欠か
せない存在

JVC

気仙沼市社協などとボランティアセンターの立ち上げから関わった。手が届きにくかった浦島地区を中心に、地域コミュニティづくりや継続のため奔走する。

「被災地を目の当たりにし、傍観者ではいられなかった」と活動を始めた山崎哲さん

(43) 東京都 岩田

健一郎さん(29) 愛知

県 〓は口をそろえる。

仮設住宅に入り、ばらばらになってしまった地区民をつなげるため、小汐太鼓保存会の復活を後押しした。

浦島小に通う児童の通学支援など、生活者に寄り添った活動が地域に受け入れられている。その証に地区の忘年会に招かれ、欠かさない存在となるなど、地域との絆が活動の原動力となっている。

浦島地区は地理的に買い物などが不便な状況にある。今後は地区内での定期市の開催も考えている。